

II. 特別講演

1 MRIを用いた神経系の機能画像について

新潟大学脳研究所
統合脳機能研究センター
脳機能解析学分野准教授
松澤 等

2 骨軟部疾患の画像診断：MRIのピットフォール

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
放射線診断治療学教授
上谷 雅孝

第57回新潟画像医学研究会

日時 平成19年11月10日(土)
午後2時～
会場 長岡グランドホテル 2階
「悠久南の間」

I. 一般演題

1 肺癌の上矢状静脈洞浸潤により脳梗塞をきたした1例

田所 央・渡辺 秀明・本山 浩
渡邊 浩之*・岡崎 悦夫**
阿部 博史
立川総合病院循環器脳血管センター
脳神経外科
同 神経内科*
立川総合病院病理科**

症例は80歳男性，7月20日～後頭部痛出現。7

月30日当院神経内科初診。頭部MRIで頭蓋骨腫瘍が疑われるため，造影し再検することとなる。8月13日より頭痛悪化，食欲不振出現した為，8月16日神経内科再診。神経学的に局所所見を認めないが，頭部MRIで上矢状静脈洞閉塞症による脳梗塞の診断にて入院。入院後閉塞の改善目的にエダラボン，ヘパリンの投与を開始。転移性頭蓋骨腫瘍を評価するため頭部ガドリニウム造影MRI，MRVの撮影，他の部位への骨転移の有無を検索するため骨シンチグラムを施行。原発巣の検索目的としては全身CT，腫瘍マーカーの測定，喀痰細胞診を施行。以上の検査により，1.肺癌の頭蓋骨転移・上矢状静脈洞浸潤，2.右後頭葉脳梗塞，3.転移性肝腫瘍（S7領域），4.転移性左殿筋腫瘍，5.転移性右坐骨腫瘍と診断。組織型を確認した上で，治療の方針を決定するため，当科転科し頭蓋骨生検施行。病理学的検査の結果，肺扁平上皮癌の頭蓋骨転移，上矢状静脈洞への癌浸潤と診断した。

肺癌が頭蓋骨へ転移し，上矢状静脈洞への癌浸潤により脳梗塞をきたした稀な症例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

2 低血糖と低血糖脳症の頭部MRI所見

梅田麻衣子・梅田 能生・小宅 睦郎
藤田 信也・岡本浩一郎*
長岡赤十字病院神経内科
新潟大学脳研究所統合脳機能研究
センター脳機能解析学部門*

一過性の低血糖による意識障害と低血糖脳症の4例で頭部MRI所見を検討した。重症の低血糖脳症2例では大脳皮質と基底核が障害され，低酸素性虚血性脳症の所見と類似していたが，低血糖脳症では視床が障害されない点が異なっていた。一方，低血糖の超急性期では，脳梁膨大部，内包，放線冠，中小脳脚がDWIで高信号を呈したが，その所見は一過性であった。低血糖で高信号になる病態は，細胞外液が減少し細胞性浮腫をきたすためと考えられている。白質が優位に障害される原因は，ミエリンは水分含有量が比較的多く，上記

の部位は細胞外液の移動による影響を受けやすいためではないかと考えられている。一過性の低血糖昏睡では白質が優位に障害されるのに対し、低血糖脳症に陥ると、基底核から大脳皮質まで広範に障害され、症状も改善しない。意識障害で低血糖を鑑別することは当然であるが、DWIでの白質の特徴的な所見からも低血糖を疑うことが重要である。

3 VSRADによるアルツハイマー型認知症患者および脳ドック受診者の検討

川上 明男・粟森 和行

下越病院神経内科

VSRADを用いて65～86才のアルツハイマー患者49名(以下A群)と54～78才の脳ドック受診者61名について検討を行った。MRIにて撮像、①海馬傍回萎縮の程度②脳全体の萎縮割合(%),③海馬傍回の萎縮割合(%),④海馬傍回と脳全体の各萎縮割合の比(③÷②)を算出し検討した。

【まとめ】

- ①～④全てA群で高値を認め、VSRADはA群の診断に有用と思われた。
- ①②の増加はA群の重症度と相関した。
- A群の進行に伴い海馬傍回のみならず大脳全体の萎縮が進行すると思われた。
- ドック群では、①④が加齢に伴い高くなる傾向がある。アルツハイマー的な変化と言うより、加齢の変化もあると思われた。

正常者データベースの年齢は54～86才よりもう少し細かく分ける必要もあると思われた。

4 回腸子宮内膜症の1例

谷 由子・西原眞美子・丸山 克也
高野 徹・伊藤 猛・内田 克之*
奥泉 譲**

長岡赤十字病院放射線科
同 外科*

県立中央病院放射線診断科**

症例は29歳女性で、中学1年で子宮内膜症の診断をされていた。原因不明の腸閉塞で発症し保存的治療で軽快するもその後同様の症状を反復し、月経との同期性から子宮内膜症を疑われた。CTで終末回腸の浮腫と右卵巢周囲へのつづら折りの癒着があり、ここでの腸閉塞であった。MRIで両側卵巢内膜症性嚢胞を認め、癒着部終末回腸に片側性回腸壁肥厚があり、同部はT2WIで低信号を呈し脂肪抑制T1WIで点状高信号が散見され、回腸子宮内膜症と診断された。ホルモン療法を施行したが治療抵抗性であったため回腸部分切除術を施行し、病理所見では回腸筋層内に子宮内膜組織、漿膜側には強い繊維化を認めた。開腹術歴のない性成熟期女性のイレウスでは、本症の可能性を念頭に病歴聴取や検査を進めるべきと思われた。

5 膝窩動脈捕捉症候群の1例

霜越 敏和・小日向美華・奥泉 譲
木原 好則

県立中央病院放射線診断科

〔症例〕30歳代男性。

【主訴】歩行時の右下肢痛。

【既往歴】特記事項なし。

【喫煙歴】30本/日×約20年。

【現病歴】2006年春頃から肉体労働が終わり徒歩で帰宅途中、右下肢の疼痛を自覚。同年12月に近医を受診し、閉塞性動脈硬化症が疑われ当院循環器科に紹介された。

【身体所見】筋骨隆々。

【造影CT】骨盤腔内から下腿までの動脈のうち、右膝窩動脈のみ閉塞。

【MRI】右下肢の腓腹筋内側頭が外側へ偏位し、